
Meet again - お前と会いたい3つの理由

甲斐 京介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Meet again - お前と会いたい3つの理由

【Nコード】

N9273G

【作者名】

甲斐 京介

【あらすじ】

主人公・九京介の家に居候している妖怪“鵜”（名前：鵜）。彼はある3つの理由から自分の約1000年前の主人に再び会いたいと願う。若干ほのぼのギャグ系+たまにシリアスな妖怪ファンタジー！！にしようと思ってます。大丈夫という勇者様はドウゾ！

序話

それは深い闇に包まれた森の中。

『はあっ、はあ……っ』

『HA!どーした、息が上がってんぜ?』

その女は俺をキッと睨みつける。

『う、うるさい、わよ……!』

『そんなんでこの俺を捕まえられんのかよ?』

ここ3日こんな感じで、その女は俺を追いかけてくる。

俺はその女に問いかけた。

『なあ、なんで俺をそんなに捕まえたいんだ?』

『それは、きやあ!』

『!……!』

女は木の根につまずいて転んだ。

ずっと追いかけてくるから、少しの情が湧いてしまったんだろう。俺はほとんど反射的に、その女を助けた。……助けてしまった。

俺の腕の中で、女はふわりと笑い、俺の首に腕をまわした。

『やっとなつかまえたわ! 鶴ぬえ、わたしの鶴。』

あなたの名前は、

廻り
めくり
』

「 という夢を見た。」

「へえ。それで？」

「What's!?!?おいおい、相変わらず素っ気ねーなあ」

刻はまだ薄暗い朝。

僕

九いちごへんきまゆげ 京介

は、一人でゆっくり朝食をとって

いるところだった。

ところが、この気持ちいい朝を妨害してくる奴がいる。それがこいつ 鶯つぐみだ。

鶯は妖怪“鶯”だ。

妖怪“鶯”は一般に【サルの顔、タヌキの胴体、トラの手足を持ち、この鳥の寂しげで気味の悪い鳴き声から平安時代頃の凶鳥】とされている。

しかし鶯は、端正な顔立ち、無駄のない引き締まった体、少し長めの艶やかな黒髪。さらに妖怪特有のものだろっ妖艶さには、ほとんどの女性が思わずヒトメボレしてしまうのではないかと思う。

つまり鶯はビジュアル的には完全無欠だということ。ただしこいつは、

かなりうるさい。

おそらく、こいつがうちに来てから静かだったことがない。(『鶯』という名は僕がつけたのだが、鶯は『鶯トラクグミだから“鶯”なんて単純すぎるだろ !!!』とか騒いでたっけ…) (

ちなみに、僕と鶯が出会った経緯はまた後々。

平安時代ごろの妖怪だというのに、なぜか英語まじりの口調だし。自分で“俺は妖怪最強だ！”とか言ってるし……。

……と、話がそれてしまったね。

ああ、話をしているうちにもうこんな時間だ。学校に行かないと……。

「きょーすけー??またs c h o o l かー?」

「ああ」

「俺も行くー!」

「だめだ。鶯は留守番してろ。火元に注意しろよー」

「ええ　　!?!?」

俺は一緒に行きたがる鶯を制し、いつもの学校に向かった。

序話（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました！

まさかの主人公と俺の名前がかぶってることに焦りました スミマ
セン

初投稿なのでまだまだ未熟ですが宜しくお願いします

01：陰陽師来る！

登校中

「「イチジクさま！イチジクさま
！！！」」
「？」

僕に話しかけてきたのは妖怪“白坊主”と“黒坊主”だった。何やら慌てているようだ。（ちなみに、僕は鶇をはじめとするいろんな妖怪の面倒を看たりしてるから、何かと妖怪やその類に慕われている）

「どーした、二人とも？もしかしてまた喧嘩か？」

「違うんです！違うんです！（黒）」

「あのね！あのね！（白）」

「大変なんです！大変なんです！（黒）」

「たいへんなの！たいへんなの！（白）」

「あー、あー、わかったから、もうちょっと落ち着いて話して……」

いつも喧嘩ばかりしている二人が、こんなに慌ててどうしたの
だろう？

僕は宥めたが、二人は落ち着く様子がない。しかし、なんとか二人は話してくれた。

「陰陽師、です……！」

「そーなの！おんみょうじ……！」

「陰陽師？……それが、どうしたんだ？」

陰陽師という、聞きなれない言葉を聞いて、僕は眉をひそめる。

「来たんです！この町に！オイラたち消されちまう（ガタガタ）」

「イチジクさまのがっこうにも！ふたり！みんなきえちゃう（ブルブル）」

「なんつ……！！？」

陰陽師とは、

呪術、占い、除霊等を専門とする者を指す。……つまり、

怪の敵、ということだ。

妖

本当だったら、かなりまずい。こいつら全員消されかねない。いや、僕的には厄介払いができていいのだが……、それだとさすがに忍びない。

僕は二人に「わかった、何とかする」と言い残し、学校に急いだ。

学校

ダダダダダダダダダ！！！！ガタンツ！！！！

僕は、全速力走って学校に着いた。よかった、少し早めの時間だったのにもかかわらず、僕の教室には何人か生徒がいた。

「あ、おはよー」
「はよつ!!!九!^{いちじく}……どーしたんだ？」

クラスメイトが朝の挨拶をしてくる。

僕はそれを軽く聞き流し、一番聞きたかったことを聞いた。

「ハア、ハア、ああ、おはよう(ニコツ)ところで、今日、転入生とか、いない、かな?この学年だけじゃなくても、いいんだけど……」

「あ、それなら、」

クラスメイトの一人(宮下さん)が何か知っている模様。それは
もしや、

「このクラス(1組)と4組に転入生が来るとかなんとか……」

「おお!マジで!?(岩倉)」

「二人は兄妹で、しかも陰陽師の家系らしいよ?(橘さん)」

「『陰陽師!?!?(僕を含めた一同)』」

ヤッタ!!!中2みたいなノリになっちゃったけど、当たり前!
……いや?まだ事態の改善にはなっていない! 妖怪消したり
すんのかな?なんとか和解とかできないかな?

僕がいろいろ考えているうちに、学活(HRというのか……?)
が始まってしまった。

「えー、みんなもう知ってると思いますが、今日は転校生がいま
すー。(先生)」

「源^{みなもと}かぐやです。よ、よろしく、お願いします……」

そこにいたのは、僕でもフツーにビックリしちゃうほどかわいい女の子だった。

艶のある日本人女性らしい黒髪のロング。凜とした、それでいてかわいらしい顔立ち。美しい立ち姿。思わず息を呑むほどだ……。

と、いかんいかん。この子は今一番警戒しなくちゃいけない子なんだ。いつものように冷静に……。

だいたい消されるかもしれないのは僕じゃないんだし。いや、でもやっぱり怖いな。なるべく話とかはしないようにしよう。

しかし、

「えっと……、こんにちは……」

「ど、どーも……」

残念ながら、僕は妖怪には好かれているが、カミサマには好かれていないようだ。

源さんの席は僕の隣だったのだ。（死亡フラグ）

.

02：鶴と源 前

「へ、へえー……。えーと、あ、でも、陰陽師って大変そうだね？」

「そんなこと……。あ、でも勉強とかは大変かな」

イキナリ昼休み

僕と源さんみなもとは何故か仲良くなっていた。(いや、『なぜか』というか、源さんに話しかけた僕の愉快的クラスメイト達が、事あるごとに僕に話を振るからなのだが……。)

実は(自称)人見知りな僕は、源さんと話していると、よく話が途切れる。うーん、これは参ったな……。

その時

ヴ、ヴ、ヴ

と、僕の携帯が鳴りだした。(バイブレーション)

「あ、あー…、電話だ。ちょ、ちよつとごめんね？」

「ええ。」

フー……。助かった。僕、あんな雰囲気ちよつと苦手なんだよね。誰だか分らないがナイスタイミング！

僕は、着信を見てみた。

着信 自宅

うおおい！……！……？前言撤回！

僕の脳内では【予想】

・自宅からの着信＝鷓つくみからの連絡
・連絡内容（8割）：「なんか暇だから（そっちに）遊びに行くかならな！」

（2割）：その他

・今こっちに来る 消される
という計算（？）が一瞬にして弾き出された。

いや、もしかしたら僕の計算違いかも！うん。そう信じよう！

僕は通話ボタンを押した。

『よう、きよーすけ！なんか今暇だから遊びに行ってもいいか！？いいな！じゃあな、きよ すけ！』

「え、ちよ……！」

ブツツ、ツ、ツ、ツ

…

…

うん。まずい。

いや、でも、さっきまで源さんと話していたけど、妖怪だからと言って問答無用で消しちゃうような悪い人ではなさそうだし。大丈夫だよ。うん。

ところが

ダダダダダダダ！！！！バタンツ！！！！！！

「かぐや!!!」

「「「!?!?!」」」(一同)

「あ、にいさま」

突然勢いよく教室に入ってきた、源さんが『にいさま』と呼んだその男は(そつえば転校生は兄妹だつて言つてたつてよく似てるな)、源さんを見つけるなり、ズンズンと歩み寄ってきた。

「かぐや、ずっと一緒にいてやれなかつたが大丈夫だったか?何かわからないこととか、不安なことはないか??ちゃんと馴染めているか??困つたことがあつたらいつでもにいさまに、」

どうやら彼は非常にシスターコンプレックスらしい。妹が心配だったという理由だけでわざわざ駆けつけて来たらしい。

しかし、いつものことなのか、源さんは『うん。大丈夫だよ、にいさま。』とだけ答える。

と、その時、

「京さま、えへへ 実は今日、この雪女が京さまのためにお弁当を作ってきたんですよ!!よかったら召し上がってください」
と、雪女が教室に入ってきた。

当然、妖怪は普通の人には見えないので雪女は堂々と入ってくる。

「ああ、雪女か、ありがとう。」

と、僕がその(雪女の手作りだと思われる、凍ってしまった)弁当を受け取るうとした、その時、

「なつ……!!?こんなところに雪女だ?!?これはいかん!妖魔・

即滅！臨・兵・闘・者・皆・陳・裂・在・前！
「きゃあああああ！！？」

源（兄）くんは雪女を見つけるなり、問答無用で九字を唱えだした。途端に油断していた雪女はその場に倒れこむ。

大丈夫だろうか？

「あ、うう……うく……」

よかった、まだ息があるみたいだ。しかし、源くんも雪女の息がまだあると知るや否や、再び九字を唱えだす。

「ムツ！まだ息があるか、しぶといな。…臨・兵・闘……」

このままでは雪女が消されてしまう。だが、源くんみたいにおもむろに妖怪のことを言うと、この場にいる普通の生徒たちに変人扱いされる。

……やむを得ない、アレ（・・）をしよう。

「う、うわぁー」
「バタンツ！！！！」

僕は机を倒した。それで、机を立て直すふりをして雪女を担ぎあげる。

「い、いやー、参ったなー…ア、アハハ、ハ」

「て、オイお前…！雪女が」

「おおっとお！？今度は急に腹痛がー」

「え？」

「という事で、僕は保健室に行ってくるね！先生にはそう言っておいて？」

そういつと、僕は雪女を担いだまま、その場を後にする。
うん。これが作戦だけど？ て、こら。期待外れとか言うんじ
ゃない！

僕は保健室にはいかず、校舎裏の、目立たない日陰に既にぐったり
している雪女を連れて行った。保健室だと誰か来るかもしれないか
ら、雪女を介抱してやれないからね。

まあ、ここにはだれも来ないだろう。そう安心したのもつかの間、
僕は背後から『オイ。』と、声をかけられた。

「あ……、源、くん。」
そこにいたのは源くんだった。（ちなみに、源さん（・・・）は追
つてこなかったようだ）

「えーと、どうしたのかなー？」
「『どうしたのかなー？』じゃねえだろ。お前、なぜそんな邪悪な
魔物を助けた？」

「え、えー？何のことかなー？妖怪なんて見えないけどなー？」
「しらばっくれんな。じゃあなんでこんなところにいんだよ？」
「え？あ！あー、み、道を間違えたのかなー？」

というように、僕が言い訳を届けていると、彼は少し天然なのか、
『そうなのか？』と信じ始めた。しかし、

「きよ すけ ？どこだ ？？？お、いたいた！」

と、タイミング悪く鶯が遊びに来てしまった。しかも鶯はそ
の時【猿の顔、狸の胴体、虎の手足を持ち、尾は蛇】という、いか

にも妖怪“鵜”の状態だった。(ちなみに、前々回説明したような人間の姿は、鵜自身の妖力で変化へんげしているのであって、本当の姿ではない)

それはともかく、(だいたい予想できるだろうと思うけど)源くんは、当然、僕と明らかに親しそうにしている妖怪“鵜”に反応してきた。

……まあ、鵜は普通のそこら辺にいる妖怪なんかとは邪悪さ(?)みたいなものが格段に上だからね。

しかし、

「鵜だと!?やはりお前……!!」

「え、あ、これは……!!」

「おい、テメエ!! 名を名乗れ。」

「ちょ!?鵜!?」

ちょ!?鵜まで喧嘩腰なんですけど!?なんでだよ!初対面でイガミ合わないですよ!!

しかもなぜか、源くんは素直に答える。

「ふん!特別に名乗ってやる。」

源みなもとい頼圖だ。覚えておけ。」

「源、だと?」

「おい、お前も名乗れよ。」

「チツ、鵜だ。おい、きよーすけ。…帰るぞ。」

「あ?いや、これから午後の授業が」

「いーいーかーらー!帰るんだ!……!!」

「うえ!?ちょ!?」

鵜は僕(と倒れていた雪女)をムリヤリ背中に乗せ、その場を後にした。(ああ、学校が……(泣))

それにしても、二人は知り合いだったのだろうか？源くんはいつもああだとしても、馬鹿つぐみがここまで敵意を示したことなんて今までに一度もない（と思う）。二人の関係も気になるしな。

僕は家に帰ってから、いろいろ問いただしてみることにした。

02：鶴と源 前 (後書き)

後編へ続きます

03：鶴と源 後（前書き）

この物語はフィクションです。

実際の事件及び出来事・人物・団体とは一切関係ありません。

03：鵜と源 後

現在、PM1：42。自宅の寝室。僕は雪女を介抱しながら【にっこり】と笑って鵜つぐみに問いかけた。

「さあ、鵜。説明してもらおうか。」

「Ah？」

「僕がなぜ、学校を早退しなくてはならなかったのか！そしてお前がなぜ源くんになぜわざわざ喧嘩を売るようなことをしたのか！それから、お前と源くんの関係とか！さあ！」

僕は意味不明すぎていつもよりテンション高めになってしまっているのに、鵜は何故かいまだに不機嫌そうにしている。

僕は「Quieting」（落ち着け）と不本意ながら鵜になだめられた。

そして鵜は何かを思い出しながら話し始めた。

「平安時代末期頃だったか、天皇の住む御所、確か、清涼殿に毎晩のように妖怪“鵜ぬえ”の不気味な声が響き渡った。

天皇はこれに恐怖し、遂に病にかかった。

側近はかつて弓を鳴らして妖怪を退けたある男に倣い、ある弓の達人にこの妖怪の退治を命じた。」

「ある弓の達人？」

「その男の名は、みなもと源頼政。」

「なっ、源……!?!？」

鶯は目を伏せて続ける。

「源には妹がいた。しかしそいつの存在は、腹違いだったから一般には公表されていなかった。源はそいつを使って妖怪“鵺”をとらえることに成功した。“鵺”を捕まえることができれば、源家として認めてやると言ったんだ。」

だが、当然それは嘘で、妖怪“鵺”を捕まえた後、そいつは源家の地下牢に監禁された。そして妖怪“鵺”はというと源に飼いならされた。」

「ひどい話だね。その妹さんはどうなったんだ？」

「そいつは妖怪“鵺”に“廻めぐ”という名をつけていた。そいつは地下牢を抜け、廻とともに源から逃げ回った。しかし、

そいつは源に捕まり、肉体を殺され、魂は鏡に封印された。そして妖怪“鵺”は過度の玉体を受け、拳句、ある溪谷に封印した。」

「肉体を？そんなことが……」

「残念ながら、できるのが源だ。」

僕は息をのんだ。そんなことが……

そして、僕はもうひとつ気になったことを質問した。

「その、妖怪“鵺”っていうのは、もしかして、」

「俺だ。……そして、その妹ってのは俺の前の、というか、今も契約は引き続いているもう一人の主人だ。…名前は返してくれなかったからな。」

今は人間の状態の鶯が僕の方を真剣に見つめて言う。

「源は、おそらく危険だ。近付かない方がいい、と言いたいたいところだが……。俺ら妖怪が消されそうな時には、その、助けたくない、か……？」

意外だった。鶯が僕にお願いしてくるなんて。

「『約束を守る』ための一番の方法は『約束しない』ことだ。」

「……きよ すけ」

僕は鶯の頭を撫でていった。

「やれるだけやってみるよ【ニッコシ】」

「……！！きよーすけー！！」

鶯は僕にギュッと抱きついてきた。

ホントに……、これだから妖怪が好きになっちゃったのかな？

.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9273g/>

Meet again - お前と会いたい3つの理由

2010年10月14日02時20分発行